

福祉ボランティア体験記②

～ボランティアを通して見えてくるもの～

かなり昔ですが、亡き母をデイサービスに通わせていた経験があり、当時は、自分の息抜き、家事などの雑用の時間が欲しい・・・そういう背景もありましたが、何より望んでいたのは、家にこもりきりの母が、沢山の方と触れ合ったりする時間をつくることで「少しでも症状や体調の改善ができてほしい」そういう一抹の願いからでした。

亡き母に尋ねることはできないので、今になって、具体的に感想をきくことはかきませんが、ボランティアとして老人福祉施設（デイサービス）に入ってみて、利用者さんと職員（スタッフさんなど）の意識のずれ、が少なからずあるように感じます。

職員さんは利用者さんを「(病気だから) 何もしたがない人たち」と、とらえているようです。

しかし、実際近くで接してみると、意欲的な方もたくさんおられます。

そして「書道」という「文字を書く作業」という特性からか「書字障害」の方も沢山いて**利用者さんの気持ちとしては「できない」のであってそれを「したくない、面倒」と職員示しているのだということが分かってきました。**

いわゆる「生活障害」という認知症の症状の一部の現れではないかと思えます。

それを職員さんは「なにもしたがない無気力」ととらえている。

ここがいわゆる「**認識のずれ**」です（全部がそうだとはいえないことも事実ですが）

活動に参加されない方でちょっと気になるのは、雑談やゲームに興じている方以外の「TVをぼんやり見ている利用者さん」の存在です。

そんな方こそ、症状が進んだ方かもしれず、ケアが大切なのではないかと思うのです。

いわゆる「お話し相手」が必要なのではないのでしょうか。

職員さんが少人数であれば「シニアボランティア」として会社をリタイアされた方で、話し好きの方に「話し相手」として活動していただくこともできます。

若年層より、対話もスムーズに進んでゆくのではないのでしょうか。

実際福岡市では「シニアボランティア」に力をいれつつあるようです。

興味深いことにアルツハイマーの認知症の症状を劇的に改善させる「リハビリ」の存在が医療の最前線で明らかになってきました。

ここでは割愛しますが、デイサービスでも取り入れられやすいものも少なからずあるようです。

前述のように、家族は「絶望的でもデイに通わせることで一抹の症状の回復」を望んでいるわけですからデイで行われるサービスが「医学的に裏打ちされた」ゲームであったり、イベントであったらどれだけ救われるのでしょうか。

そして**職員の皆さんのスキルアップ、意識が高い施設ほど、現実に「集客」という点でも結びつき効果があがってゆくのではないかと感じています。**